

「本城満茂と城下町本荘」(講演)

長谷川 成 一

はじめに

ただいま過分な紹介をいただいた長谷川でございます。

式典におきまして本城正也様から、「本城家文書」が、いかに長い間、筆舌に尽しがたい努力でもって本城家で保管・保存されてきたのか、苦闘の歴史をご紹介いただき、大変感銘いたしました。私、正也様のご尊父であります善一様に、二十数年前、直接お目にかかりました。善一様の本城家の歴史に対する「誇り」は並々ならぬものであって、『本莊市史』の編纂におきましても、ご期待に添うためにこれからがんばらなくてはいけないと、当時、思いを新たにすることを覚えています。今日の話においても、本城家文書の資料を活用させていただきます。

『本莊市史』の編纂は、本年三月に刊行された普及版

『本莊の歴史』でもって第一期を終了しましたが、予定の編纂期間をはるかに超過して、長期間にわたったことについては、市民の皆さまにお詫びをしなければなりません。長期の編纂事業を寛容の気持ちをもって、辛抱強く待つてくださった市民の皆さまに御礼を申しあげたいと思います。

この二十数年、まさに市史の編纂とともにありました。このことは自分の研究・勉強の内容を深めることでもありました。監修者でありました故佐藤憲一先生、それから今日会場にお運びいただいております、顧問の山口啓二先生にも厚いご指導をいただいたことに、ここで改めて感謝したいと思います。

本講演におきましては通史編刊行後、新たに発見された史料によって、城下町本荘に関する新たな見解といひましょうか、試論・私論を申し述べ、本荘について考え

る新たな素材としていただきたいと存じます。

* 本文で引用した史料は、本文末に《史料》として、番号順(①～⑪)に掲げたので参照されたい。

一 善応寺調査の新出史料をめぐって

昨年八月、市内古雪の善^{ぜん}応^{おう}寺様(以下、敬称略)のご好意によりまして、未公開だった同寺の史料調査をさせていただきますました。市史編さん室からは、私長谷川と佐々木士郎委員・鈴木登委員、それから筑波大学の山本隆志教授、岩手県立大学短期大学部の誉^{たか}田慶信教授をもつて調査体制を組みまして、約一週間にわたって調査、写真の撮影をしました。その結果、新発見の史料が相次ぎ、『本莊市史』刊行後の調査としては画期的なものとなりました。そこで可能な限り早くその成果を市民の皆さんに発表していくのがよいのではないか、その必要があるのではないかとの共通認識にいたり、一部は普及版『本莊の歴史』に披露しましたのでご覧下さい(同書コラム「内越郷古雪」・「古雪尊重寺と門徒たち」)。

しかしそれはあくまでも一部でして、執筆時間も少な

いという制約もありましたので、本日はその成果を私なりにまとめて、市民の皆さんに広くお知らせしたいと思っています。

善応寺の新史料とは、①、②、⑥、⑨、⑩で、これが本日まで紹介するものです。新出史料に基づいて、『本莊市史』の通史編、並びに史料編等においてほとんど触れることのできなかつた戦国期から近世の初頭、江戸時代の

〔絵図1〕「慶長末年本城城下絵図」
〔『本莊市史』史料編Ⅰ上 本莊市 1985年〕

初めに至る古雪や本荘の成り立ち、その基本的な城下の枠組について、私なりの話をしたいと存じます。

なお、これからお話する重要な地点として、子吉川、古雪中嶋、尊重寺、善応寺川、超光寺、広誓寺など、位置関係を【絵図1】でご覧下さい。

二 本願寺教団による北日本への教線の拡大

史料の①、②をご覧ください。①「善応寺由緒書並寺宝目録」は、寛保元年（一七四一）の史料で、傍線の箇所には「文明四年（一四七二）ニ開基了順ハ内越郷古雪へ一字建立シテヨリ、今ノ古雪境地ニ移住ハ慶長三戌年（二五九八）也、」とあります。

文明四年に、内越郷の古雪に一字を建立したということです。一字とは、尊重寺という寺です。尊重寺の呼び名は、「そんちようじ」と読むのか、実はよく分らなかったのですが、③の慶長十七年（一六二二）の「黒瀬村・土谷村・赤田村・古雪町検地帳」（以下、由利郡検地帳と略記）に「そんぢゅうし」と出てきたので、「そんじゅうし」という呼び名だったことが分りました。尊重寺とは、現

在の善応寺の前身です。江戸時代の初めに、東本願寺の宗主から善応寺へ改めよという下命がありまして、尊重寺から善応寺と寺名を変更したということが後世の史料に出てきます。

①の史料では、尊重寺が内越郷古雪に一字を建立し、慶長三年に今の古雪の境地へ移転したとあります。古雪の境地とは、後で詳しく述べますが現在の古雪の善応寺の場所とみて間違いありません。ということは、尊重寺は内越郷の古雪から同郷の古雪の境地に移ったということとを、①の史料は示しています。

②「善応寺由緒書」は、明治十一年（一八七八）十月に作成したものです。これによりますと、傍線部の箇所ですが「文明三辛卯四月下旬、蓮如上人ノ依命出羽ノ国エ下向シ、内越郷ノ内古雪中嶋ニ一字ヲ創立シ、寺号ヲ尊重寺ト号ス、」とあり、また後半の方に、「又慶長三戌年（二五九八）三月九日当地エ移転ス、」と出てきます。

慶長末年の本城城下絵図【絵図1】の左側の上端のところに、古雪中嶋があります。尊重寺は、この古雪中嶋に一字を建立したと言うのです。②の史料によつて、①の史料では分らなかった、当初古雪のどこに尊重寺が建

立されたのかということが判明しました。

②には他に大変興味深い内容が記されていて、本願寺第八代の蓮如上人が、尊重寺の開基の了順に向かつて出羽の国の布教のために、出羽へ行きなさいと、直接命令をしたと記しています。この時、蓮如上人は越前国の吉崎道場（福井県坂井郡金津町）におりました。当時、浄土真宗は比叡山延暦寺の圧力により、京都の大谷にあった本願寺が破却されました。蓮如上人は京都から近江国堅田（滋賀県大津市）の本福寺へ、そして文明三年（一四七一）、越前国の吉崎へ移って道場を建立しました。吉崎は、交通の要所ですし、三方を、北潟という湖に囲まれ、すぐ日本海に出られる城郭寺院的な色彩の強い所です。加えて越前と加賀との国境に位置し、日本海に面した北潟に突き出た所に構えていました。

子吉川中州の古雪中嶋は河口付近にあつて、西側はすぐ日本海、子吉川に囲まれていました。子吉川河口のデルタ地帯の一つの島に、尊重寺は建立されたということです。ご存知のとおり大坂の石山本願寺は淀川河口のデルタ地帯に城郭要塞的な寺を構えましたし、伊勢長島（三重県桑名郡長島町）の一向一揆衆も木曽川と長良川

のデルタ地帯に砦を構えて、織田信長と戦いました。

尊重寺が古雪中嶋に一字を構えたことは、右のように当時の真宗勢力が各地に拠点を構えたケースを見た場合、歴史的な事実としてありえたのではないかと、単なる伝承として軽んじないほうがいいのではないかと考えます。

前述のように、蓮如上人は文明三年（一四七一）に吉崎に拠点を構えて、翌年には早くも尊重寺の開基の了順へ出羽国の布教を命じました。中世史では最近よく使われる文書ですが、④「藤原姓菊池氏弥高山菊池院浄願寺系譜」は浄願寺文書の中に収められているものです。内容をみてみますと、初代の弘賢は、もともと九州の出身者であります。傍線部の箇所「時文明三辛卯年（一四七一）、於越前国吉崎蒙師命、為法門弘通下向奥羽留夷地、明応八己未年（一四九九）建立於夷地松前上国一字号浄願寺、是夷地当家開基也、」とあります。さきほどの②「善応寺由緒書」と符号する点があり、ここにおいてさらに具体的になっています。

弘賢は越前国吉崎において、蓮如から直接布教を命じられ、法門弘通のため、つまり本願寺の教線を拡大するために奥羽の地に下向し、さらに蝦夷の地に留まるよう

に、という命令を受けました。明応八年（一四九九）には、蝦夷の地である松前上ノ国（北海道檜山支庁檜山郡上ノ国町）に淨願寺を建立したと出ています。

上ノ国は、歴史的に見て大変興味深い場所です。時期は若干下りますが、一六二〇年代、キリスト教の宣教師アンジェリスが、蝦夷松前へキリスト教布教のため秋田から乗船して、夷島（えぞがしま）に最初に上陸したのが、この上ノ国でした。アンジェリスは、上ノ国から松前城下へ赴きますけれども、そのときアンジェリスは、松前の町検断（町役人のこと）から次のことを耳打ちされます。ここは日本ではない、従って天下すなわち將軍家がいうところのキリスト教の禁圧、禁止はここまでは及ばないのだ、と。十七世紀の初頭において、夷島・松前は日本ではないのだという認識をアンジェリスは聞きます。夷島は異域、異国の地である、というのです。

十七世紀初頭でそうであったとするならば、十五世紀の松前上ノ国は、異域、異国そのものではなかったか、と言えましょう。ということは、蓮如上人は、本願寺の教線拡大を中世国家を越えて、異域、異国へ伸張することを意図していたのではないか、と言うことに通じるので

はないでしょうか。

しかし、ことはそんなに簡単ではありません。④で、淨願寺三代の了専（りょうせん）が、永正年中、傍線部の箇所「出羽秋田郡土崎湊移住」とあるように、淨願寺が最北端の松前上ノ国から秋田土崎（つちさき）へ移転したと見えます。つまり異域、異国から本願寺の教線が後退したということが分ります。ちょうど十五世紀末から十六世紀初めにかけて、夷島を含む北方世界でアイヌ民族の大変な躍動があり、和人が拠った道南十二館（どうなんじゅうにくわん）の陥落という事件がありました。例えば、永正九年（一五二二）には、アイヌの攻撃を受けて、ウスケシ（函館市）、ついで志海苔（しうかい）（同前）などの有力な和人の城館が陥落する事態に至りました。

このように夷島からの和人の後退、アイヌ民族の攻勢、躍動という状況下にあつて、本願寺の教線は本州へいったんは後退しました。それは必ずしも全てが終ったということではなくて、絶えず北方世界との交流が、本願寺を中心とした勢力のなかで培われていくという伝統が続いていくことでした。

三 出羽国内越郷と海の有徳人

【地図1】に見えるように、本願寺教団は日本海沿岸地域に教線を拡大しました。さきほども申しましたが、最北は夷島の上ノ国でした。蓮如が吉崎道場にいたのは四年ほどで、その後、一向一揆は弾圧を受けて、一揆自体が崩壊してからも、④にあるとおり浄願寺の三代、四



〔地図1〕本願寺教団の北方への教線拡大
(15世紀後半から16世紀にかけて)

代、五代は続けて日本海北部、日本海沿岸地域に教線の拡大を図りました。これはとりもなおさず、本願寺教団にとって北方世界が、いかに重要であったかということを示しており、次に述べる話でお分りいただけるかと思っています。

本願寺教団の寺院や道場は、例えば男鹿舟越の円応寺であるとか、青森市の油川にあった大浜の円明寺（現在は弘前市に所在）などであり、これらの真宗寺院や道場を支えた多くの信者は、当時、日本海海運で生きる「海の有徳人」と呼ばれた人々でした。例えば、大浜の円明寺の門徒の中には、能登屋、加賀屋、越前屋などの国号を屋号とする人々がいました。浄土真宗の布教と交易を表裏一体とする真宗の僧侶たち、それと「海の有徳人」たちが手を相携え、両輪となって北方への教線の拡大を図ったということです。

アザラシの皮など、当時、都で珍重された品々は北方の物品です。例えば本願寺第一〇代証如上人は、天文十五年（一五四六）、⑤「証如上人日記」の中に、夷嶋浄願寺すなわち秋田の浄願寺から錦を送られてきたという文言があります。当時出羽国松山におりました安東亮

季が、証如上人に対して書状と共に、浄願寺からのことづけとして錦を一緒に送ってきたというのです。この錦とは、蝦夷錦のことではないかと推定しています。

蝦夷錦は山丹交易によってもたらされた絹織物で、その多くは、日本に来てからさまざまな形に仕立て直されました。山丹交易とは、中国の製品がアムール川流域を経由して間宮海峡を通じて、北海道にもたらされる交易形態です。その交易品の一つが蝦夷錦で、本来は明帝国、清帝国の官服でした。これら絹製品がアイヌ民族を媒介として約五千キロを経由して日本へ到達した、といわれております。これが北のシルクロードと呼ばれた流通経路です。

現在、蝦夷錦の史料上の初見は、次の記事です。文禄二年（一五九三）正月、夷島の蠣崎慶広が、肥前守護屋で秀吉に拝謁したおり、家康に対して「唐衣」を献上したということが松前藩の藩史「新羅之記録」に出てきます。とすると、天文十五年（一五四六）の夷嶋浄願寺から本願寺へ送達された錦が蝦夷錦であったとすれば、既にして山丹交易品として十六世紀前半には日本にもたらされていた可能性が出てきます。安東氏、並びに本願

寺教団の北方との関りの中で入手されたものではないでしょうか。安東氏を通じて夷嶋浄願寺から都にもたらされたのは、単なる偶然ではありません。「海の有徳人」たちと両輪となつて交易と布教に従事した真宗の僧侶たち、彼らの活躍が存在したからこそ、山丹交易品がもたらされてきたのではないか、そのように考えられるのです。

本願寺教団の拡大は、北のシルクロードに接続する交易のルートが想定されていたのであって、両者がオーバラップしたのではないのでしょうか。したがって、浄願寺からもたらされた錦が蝦夷錦であったとするならば、当時の真宗教団の動向からして、本荘・由利の地域にもいずれ蝦夷錦が発見されるのではないのでしょうか。現在、青森県では約四〇点の蝦夷錦が確認されており、ほとんどが浄土真宗の寺院から発見されました。そういうことから本荘・由利地区でも搜索・調査をすれば、遠からず蝦夷錦が見つかるのではないか、それが戦国期以来の本願寺教団の教線の拡大と北のシルクロードとのオーバラップ、あるいは接続の中において確認できるのではないかと、と楽しみにしております。

さて、「顕如上人絵像【写真1】」と同裏書【写真2】は、

画期的な発見でした。顕如上人は、本願寺光佐と申しまして、十一年間にわたり石山本願寺に立てこもって織田信長と死闘を繰りひろげた（石山合戦）人物です。尊重寺は、右の顕如上人絵像を、文禄五年（一五九六）、息子の教如上人から拝領しました。

【写真3】

【写真2】

【写真1】

「顕如上人絵像裏書」の文言は、⑥に示しましたが「善応寺常住物也」の箇所は、貼紙であって、その部分は色が変わっています。この貼紙の部分には、元々は何が書いてあったのか、それが今回の調査で判明しました。⑥にもありますように、【写真3】「一行書」の「旧雪村尊重寺常住物也」がそれです。これは別に軸装されていて、さきほどの「顕如上人絵像裏書」の書体とこの書体がほぼ合致すると、私どもの間で意見が一致しました。文禄五年の段階で、「内越郷旧雪村尊重寺」の文言が、はじめて史料の中に出てきました。今までさまざまな系図、編纂物等で知られていた由利郡内越郷の古雪村が、江戸時代以前の史料で確認できたと言うことです。

⑥から何が言えるのか。文禄五年の時期は、本願寺にとって微妙な時期で、四年前の文禄元年（一五九二）、顕如上人が死去して、教如（慶長七年へ一六〇二に東本願寺を新たに創建し、本願寺が東西に分かれる）が本願寺の第一二代を継ぎます。しかし、文禄二年、豊臣秀吉が顕如の跡を准如に受継がせると命じ、色々なトラブルが生じましたが、ここでは割愛します。それはともかく文禄五年の段階で、尊重寺が准如ではなく教如から顕

如の絵像を受けたことは、教如に与同すると決意したと解釈されます。近世において善応寺の本寺は西本願寺ではなく東本願寺ですが、十六世紀末に東本願寺の本末関係に入ったことが、⑥の「顕如上人絵像裏書」によって判明しました。

四 本城満茂の都市プラン

慶長七年（一六〇二）、由利郡は最上領に編入されますけれども、それ以降、古雪が当時の記録の中に初めて出てくるのが、③の由利郡検地帳です。これを見ると、古雪村屋敷の箇所には村といながら田畑が全くない。田畑のない村です。すべて「壺間 家一ツ」とあり、尊重寺も「壺間 同一ツ」、同とは家のことで「壺升三合 そんぢゆうし」と見えます。村とはいえず古雪村は、都市的な存在であって、「大かぢ」「かぢ」など鍛冶職が村内に存在し、有力な真宗寺院が存在していることなどを読み取れます。⑦にも見えるように、古雪村は内越郷にあって、さきほど触れました文禄五年（一五九六）「顕如上人絵像裏書」からも、内越郷の古雪村は分りましたが、同

じく⑦の子吉郷には本城村とあって、内越郷の古雪村と子吉郷の本城村とは、明確に分けて記されています。このことに注意を喚起しておきたいと思います。

⑧で、傍線を付した箇所「将又去二日より古雪御城普請二御出被成候由、御太儀ニ存候、被入御念候由」の文からは、慶長十八年（一六一三）、最上義光が古雪城普請を命じたことが分ります。普請を命じた城郭とは「絵図一」の城下絵図の中にある本城城です。この時期における本城城下の建設は、由利郡内の最上氏の総力を結集して行われたことを意味します。⑧に見えるように、築城を命じた際に本城という地名ではなく、中世・戦国期以来、由緒ある古雪の地名が用いられたことは象徴的です。本城氏は当初から古雪を町方の中核として城下に取り込むことを企図して、城下プランを練ったことを図らずもこの文言で示しているからです。

基本的な城下プランについては、【絵図2】の「白描本城城下絵図」をご覧ください。城郭を囲んで侍町が形作られ、そのほか鉄炮衆、侍町、陪臣衆などの屋敷が形作られていました。全体のプランとして面白いのは、町方として出戸町地域と古雪町地域があって、両地域を隔

てるところに川があります。これは善応寺川です。同川を隔てて西側が古雪町、東側が出戸町という町人町を作っている、ということです。

【絵図2】「白描本城城下絵図」(『本荘市史』史料編I上
本荘市 1985年)

本城の都市プランは、子吉川の南岸、善応寺川東側に城郭と侍衆、鉄砲衆、陪臣衆の町、そして町人町の出戸町が形成され、それと同川を隔てた西側の古雪町が形作られていました。古雪町は内越郷で、東側の城郭・侍町や出戸町は子吉郷です。善応寺川は郷境であり、尊重寺、後の善応寺が内越郷の端に位置し、善応寺川のすぐそばに設けられました。①にも出てきましたが、古雪の境地とは、郷境の地でもあると解釈できるのではないでしょう。古雪の町は、③慶長十七年(一六一二)の由利郡検地帳にも見えたように、中世以来の本願寺教団と「海の有徳人」たちが作り上げてきた町でした。一方、出戸町は最上氏山形藩の重臣本城満茂によって兵農分離や農・商分離の基本原則が貫かれて建設された、典型的な近世の町でした。つまり善応寺川を挟んで近世の典型的な城下の町と、中世・戦国期以来の町が併存する、複合的な町方を形成をしたという点で、本城城下は大変興味深い都市プランであるといえるでしょう。

祭礼を例にとってみると、古雪町と出戸町では祭礼の祭神が違います。祭礼の仕方も違いますし、祭日も異なります。城下の同じ町方でありながら出戸町と古雪町は一つ

の町ではなく、藩政時代にも両町が融合することはなく、町支配も異なっていました。

本城城下の町方は、性格と歴史を異にした二つの町が併存し、それを包含して成立しているのであり、本城城下の都市プランは、その点でも独特なものではなかったか、と私は考えます。

それでは、本城氏支配下の古雪の町に住んでいた人たちは、具体的にどういう人たちなのか。手掛かりとなるのが⑨、⑩で、善応寺調査において発見されました。⑨「稲葉尚政書状」と⑩「下間頼良書状」です。

⑨は、年代が推定できます。と、言いますのは、稲葉尚政は元和四年（一六一八）に亡くなっていますから、この書状は、元和四年以前に、古木（古雪）の「尊重寺門徒廿八日講中」に対して出したことが、はつきりしています。最上時代、本城満茂が支配した時期に発給したのは間違いないでしょう。もう一方の下間の書状⑩は、差し出し者が下間治部卿法眼とあって、下間頼良の花押を据えています。宛名が「古雪村尊重寺門徒廿八日講中」とあります。稲葉と下間は東本願寺の坊官で、宗主との取次ぎを行う人物です。御所跡様、また御所様に対して古

雪の尊重寺の門徒たちが、⑨では銀子六六匁を、⑩では銀子一五匁を献納したことが分かります。この講中を構成した尊重寺門徒たちこそが、古雪の住人だったのではないかと考えます。もう一つ意義を申しますと、この時期に尊重寺の門徒たちは、下間と稲葉を媒介として東本願寺と結びついていたことが判明しました。

⑪「粟津申物帳」は、大谷大学図書館に所蔵されていて、従来、未公開の史料でした。最近、自治体史の中に散見するようになりましたけれども、今でも原本は閲覧できません。一昨年、大谷大学で同史料のマイクロフィルムを調査しましたが、その際に元和二年（一六一六）からの「粟津申物帳」を閲覧して、発見したのが「粟津申物帳」元和六年正月二十六日の条です。文中、飛縁（櫓）とは、本願寺末寺の寺格を表す用語です。「羽州油利郡古（子）吉郷本城超光寺」、つまり超光寺が直接、東本願寺へ出向いて、さきほど申しました稲葉や下間と同様、取次ぎ役をつとめた粟津氏と会い、寺格を保証されたということです。粟津氏が日々記録していたのが、申物帳でした。

当時、全国各地の真宗寺院が東本願寺へ直接出かけて

行き、銀子を献納して木仏、開祖像（親鸞聖人の像、絵像）、その他、寺格の証明状などを受領しました。その際に、坊官に対して取次ぎをお願いして、それを坊官が長期間、何代にもわたって書きとめたのです。申物帳とは、右のようなものですから、記録の価値が非常に高い史料です。この中に子吉郷本城の地名が、初めて出てきました。確かな記録に出てきた初見だと思います。

善応寺川を隔てた東側に超光寺はありますが、城下絵図の中に見える超光寺は、元和六年（一六二〇）、東本願寺に出向いて、飛縁という末寺の格式を表す寺格の証明状を拝領してきました。従って、本城城下では、善応寺川を隔てた東の子吉郷に超光寺が、西の内越郷に尊重寺が位置しました。内越郷と子吉郷の境は善応寺川である、ということが、認められると思います。こののち、万治三年（一六六〇）に入ると、善応寺の九代宗哲が寺格の証明状を東本願寺へ赴いて拝領し、同じ日に本城の広誓寺も拝領したことが⑪に見えます。

超光寺は、文明五年（一四七三）、松ヶ崎（本莊市松ヶ崎）に一字を建立したといわれ、本城城下の建設に伴って本城へ移転したことが、城下絵図から分っています。

広誓寺も同様です。子吉郷本城の出戸町に、当時赤宇津と呼ばれた地から超光寺と広誓寺が移ってきたのであり、両寺のような真宗寺院も本城氏によって城下集住を命じられたのです。

右の出戸町とは別に、さきほども言いました⑨、⑩に見える古雪の廿八日講中と呼ばれた人々、彼らこそ中世以来の尊重寺と両輪をなして、日本海交易に従事した「海の有徳人」たちではないか、もしくは「海の有徳人」たちの後裔ではないか、と思います。

元和八年の最上改易後、六郷氏による本莊藩の時代に入っても、周知のように古雪は西廻航路帯の重要な湊として機能していました。中世・戦国期以来の「海の有徳人」の系譜を古雪の町と湊はそのまま受け継いだといえるでしょう。本城満茂は、古雪のもつ伝統と歴史を尊重し、城下プランの中に包み込む、あるいは組み込んで城下の都市的な発展を図ろうとしたのではないか、右のような構想に基づいた都市プランを策定し実行したのではないか、と考えるのです。

おわりに

最後になりますが、中世以来の系譜を持つ古雪と近世の典型的な町方の出戸町、その複合都市としての本城城下は、今後、更に研究の余地があるでしょう。その基盤の上に明治に入って、本荘という近代の都市が歴史を刻んだのではないか、また本荘の町の独特の気風と伝統を形作ったのではないか、と思われてなりません。

本日の演題に「本城満茂と城下町本荘」とありますが、本城満茂には、ほとんど触れることができませんでした。私の印象に過ぎないかもしれませんが、おわりに満茂が本城を城下として最終的に選定した理由について、申し上げたいと思います。

実は満茂は、主君の最上義光とかなり似た点があるのではないかと考えます。というのは、最上家は、現在の山形市を中心とした村山、最上両地方を中心とした地域に、戦国期以来、出羽探題職の伝統を持つ家として盤踞しました。しかし最上義光の一番の要望は、日本海への進出ではなかったか。最上川の河口で日本海交易に直結

する酒田の湊をいかにして掌握するか、でした。天正期の「廻船式目」に、国内有数の湊である三津七湊の一つにリストアップされた、出羽国の酒田湊を支配下におさめることは、義光の財力や領主としての権力を格段に強めるものでした。そのため、庄内の大宝寺氏などとの間で義光は死闘を繰り返しました。

ご存知の通り、満茂も本貫の地は、最上の楯岡（山形県村山市）です。そのあと、満茂は湯沢（秋田県湯沢市）に進出しましたが、湯沢も海から遠い雄勝郡の町です。慶長七年（一六〇二）、雄勝郡から由利郡の赤宇津（由利郡岩城町）へ移転したが、赤宇津は酒田のような湊ではありません。満茂が、慶長十八年（一六二三）、本城に城下町を建設したのは、主君の義光が酒田を掌握したことから、ほぼ一致する行動ではないかと思われる。中世・戦国期以来、日本海交易の伝統のある古雪の「海の有徳人」たちと古雪の町と湊の掌握は、満茂にとって本城に城下町を建設する大きな動機付けではなかったか、と考えます。

今まで、このような観点で『本荘市史』を執筆してきませんでしたが、この度の新史料の発見によって、刊行

後の市史に新たに付け加える問題が見つかったような気がします。皆さまも『本莊市史』をご覧になった時に、私の申し上げた論点が、『本莊市史』を多角的に理解いただく一助となればと願い、本日の私のお話を終えたいと思います。

ご静聴有り難うございました。

《史料》

①「善応寺由緒書並寺宝目録」寛保元年（一七四一）（善応寺蔵）

（前略）

一、当寺開闢ハ、文明四年（一四七二）ニ開基了順ハ内越郷古雪へ一字建立シテヨリ、今ノ古雪境地ニ移住ハ慶長^三二年（一五九八）也、是マテハ百二十七年ニ成ル、慶長三年ヨリ寛保元年マテハ百四十三年ニ成ル、^④レハ当寺一字建立開白ヨリ寛保元年マテ百七十年ニ成ル、

善応寺代々、

開基了順法師 二代了誓 三代了哲 四代了嚴

五代了圓 六代誘玄 七代了春 八代良真

九代宗哲 十代了然 十一代了義 十二代了頓

于時寛保元^年 西六月十日 善応寺十三世

釈歛喜（花押）

（下略）
（傍線筆者）

②「善応寺由緒書」明治十一年（一八七八）（善応寺蔵）

真宗東派婦命山善応寺

（中略）

一、創立

文明四千辰年（一四七二）五月九日、久国蓮如上人ノ弟子トナリ、法名了順ト称ス、文明三辛卯四月下旬、蓮如上人ノ依命出羽ノ国エ下向シ、内越郷ノ内古雪中嶋ニ一字ヲ創立シ、寺号ヲ尊重寺ト号ス、後同寺六代目住職雨（羽）後国由利郡ノ領主仁賀保兵庫守（頭）誠貞ノ舍弟仁賀保小五郎誠包天正丙子（四年、一五七六）八月、大坂エ馳参シ、石山ノ御堂ヲ守護シ法名誘玄ト改メ下向ノ後、

尊重寺六代目ノ住持トナル、誘玄一子了春ノ代有謂宣如
上人御代善応寺ト改称被仰付、又慶長三戊戌年（一五九

八）三月九日当地エ移転ス、（下略）

（傍線筆者）

③「黒瀬村・土谷村・赤田村・古雪町検地帳」慶長十七
年（一六二二）『本莊市史』史料編Ⅰ下 本莊市 一
九八五年 別名「由利郡検地帳」

（前略）

古雪村屋敷

老間	家 ^ナ 一ツ	三升九合	総一郎
老間	同 ^ナ 一ツ	三升九合	十郎左衛門
老間	同 ^ナ 一ツ	三升九合	市介
老間	同 ^ナ 一ツ	三升九合	三郎兵衛
老間	同 ^ナ 一ツ	三升九合	右馬丞
老間	同 ^ナ 一ツ	三升九合	理兵衛
老間	家 ^ナ 一ツ	三升九合	善助
老間	同 ^ナ 一ツ	三升九合	惣兵衛
老間	（中略）		
老間	同 ^ナ 一ツ	老升三合	藤三郎

老間	同 ^ナ 一ツ	老升三合	総九郎
老間	同 ^ナ 一ツ	老升三合	かつらや
老間	同 ^ナ 一ツ	老升三合	助三郎
老間	同 ^ナ 一ツ	一升三合	右衛門四郎
老間	家 ^同 一ツ	老升三合	彦左衛門
老間	同 ^ナ 一ツ	一升三合	ふとういん
老間	同 ^ナ 一ツ	一升三合	新七郎
老間	同 ^ナ 一ツ	老升三合	大清寺
老間	同 ^ナ 一ツ	老升三合	又四郎
老間	一ツ	老升三合	宮内少輔
老間	家 ^ナ 一ツ	老升三合	正覚院
老間	同 ^ナ 一ツ	老升三合	そんぢゆうし
老間	同 ^ナ 一ツ	老升三合	しやうみやうし
老間	同 ^ナ 一ツ	老升三合	小二郎
老間	同 ^同 一ツ	老升三合	喜兵衛
老間	同 ^同 一ツ	老升三合	藤兵衛
老間	同 ^同 一ツ	老升三合	かぢ
老間	い ^ナ へ一ツ	一升三合	ぬい殿助
老間	同 ^ナ 一ツ	老升三合	七右衛門
老間	同 ^ナ 一ツ	老升三合	大かぢ

屋敷数八拾間 家数百六拾五

此米壹石七斗仁升 (下略) (傍線筆者)

④「藤原姓菊池氏弥高山菊池院淨願寺系譜」(淨願寺文書)

初代

弘賢、初名東兵庫頭、後号菊池次郎武弘、兼朝四男、十九代持朝弟矣、

南朝衰北朝盛、当家数代守義不屈、雖然賊臣榮忠臣枯、菊池家亦漸遲、因而感起菩提心、奉慕蓮如上人為徒弟、深伝宗義、出家得度矣、荷負師恩常隨昵、時文明三辛卯年(一二四七二)、於越前国吉崎蒙師命、為法門弘通下向奥羽留夷地、明応八己未年(一四九九)建立於夷地松前上国一字号淨願寺、是夷地当家開基也、文龜三癸亥四月三日遷化、

(中略)

三代

了專、永正中(一五〇四—一一)出羽秋田郡土崎湊移住、
松山淨明寺并奥州津輕弘前・波岡・鰺ヶ澤所々新寺起立、

四代

了乘 天文十五丙午(一五四六)八月二十四日得度、起立塩越淨專寺・大曲安養寺、(下略)

五代

了賢 天正二甲戌年(一五七四)二月十日得度、起立能代願勝寺・同淨明寺・船越円応寺・金浦淨蓮寺・長野善法寺・角館本明寺、其外白岩村・湯沢・酒田処々起立新寺、 (傍線筆者)

⑤「証如上人日記」天文十五年(一五四六)七月二十三

日条(『五所川原市史』史料編2 上卷 五所川原市一九九五年)

廿三日

一、自出羽国秋田湊左衛門佐入道為先年返、錦来、夷嶋淨願寺事付也、

⑥「顯如上人繪像裏書」文祿五年(一五九六)七月二十八日(善応寺藏 軸装 絹本着色)

『大谷本願寺釈教如（花押）』

文禄五丙申年七月廿八日

出羽国由利郡内越郷

顕如上人真影

「善応寺常住物也」（別筆、貼紙）

願主 了春

*貼紙「善応寺常住物也」の箇所は、本来「旧雪村尊重寺常住物也」（一行書で別に軸装されたもの）とあったものが切りとられ、後年、同所に「善応寺常住物也」の紙片が貼られたものと推定される。（写真3）参照。

⑦「由利郡中慶長年中比検地見出帳」（『本莊市史』史料

編Ⅰ下 本莊市 一九八五年）

（前略）

女岡村	平岡村	中目村	横山村
黒瀬村	牛寺村	中館村	大浦村
内越郷	西畠村	赤田村	福田村
	深沢村	東畠村	土屋村
	院内村	山田村	川口村
			古雪村
			漆畠村
			但シ五冊

右式十ヶ村高

一、本田九万千六百三拾八束刈

此米千式百九十壹石壹斗三升

一、出田壹万九千式百式拾五束刈

（中略）

藤崎村	玉野池村	新所村	葛法村
子吉郷	田高村	新山村	上原村
			舟岡村
本城村	薬師堂村		但シ二冊

右拾ヶ村之高
（傍線筆者）

⑧「日野光久書状」慶長十八年（一六一三）二月五日（『本

莊市史』史料編Ⅰ上 本莊市 一九八四年）

（前欠）

式部御近所ニ罷有候条、御念比候者可恭候、

先度者、御検地出目御加僧ニ被進候御礼金之事、庄内な
と御なミよりハ、少分ニ被仰出候、御満足候通、殊先達
毛毳被進候、両様忝之由、態々御飛札即披露申候得ハ、於
殿様も御満足ニ被思召候、定而御返事ニ可有之候、将又
去二日より古雪御城普請ニ御出被成候由、御太儀ニ存候、
被入御念候由、長尾美作殿よりも被申越候、其等之儀を

も懇ニ披露仕候、弥々以一人被入御念可然存候、且者貴公様御為候と申、豊前殿も一人御満足可被成候、美作方御談合被成、被人御精を可然候、随而御加増御札之儀、一度ニ皆々へハとても罷成間敷候条、其内五両分三両分も御酒肴ニ被差添、御使者をも被為相上、御墨付を御取、其外をハ秋中ニ被成候とも、先忝由を被為仰上可然候、委赤尾津・滝沢へ御談合尤候、恐々謹言、

二月五日

日野備中守

光久（花押影）

岩屋右兵衛様

御報

（傍線筆者）

⑨「稲葉尚政書状」（継紙）（善心寺蔵 元和初期力）

（黒印）

御所様為志銀子六十六匁進上之通、具遂披露候処、遠路懇志之至神妙被思食候、就其連々如聽聞安心味定之上候ハ、仏恩報謝候、称名念仏無由断可被相嗜事、自何以肝要之旨御意候、為其被執御印候也、

稲葉嘉兵衛

七月廿八日

尚政（花押）

出羽国古木尊重寺門徒

廿八日講

（傍線筆者）

⑩「下間頼良書状」（継紙）（善心寺蔵）

（黒印）

御門跡様へ為志銀子十五匁進上之通、具ニ遂披露候処ニ、遠路懇志之至神妙被思食候由、相心得可申下之旨被仰出候、就其連々如聽聞各信心決定之上ニハ、弥仏恩報謝之称名念仏無由断可被相嗜事、從何以肝要之旨御意候、為其被顕御印候者也、

六月廿日

頼良（花押）

下間治部卿法眼

出羽国由利郡古雪村尊重寺門徒

廿八日講中（傍線筆者）

（裏中央）「一書」

⑪「粟津申物帳」（大谷大学図書館蔵）

〔元和六年（一六二〇）正月二十六日条〕

同日卯刻

一、飛縁

羽州油利郡古（子）吉郷本城超光寺

超光寺

（中略）

〔万治三年（一六六〇）正月二十七日〕

正月廿七日辰刻

一、飛檐

（印）

羽州油利郡本城古雪

善応寺

宗哲

（中略）

〔万治三年（一六六〇）正月二十七日〕

正月廿七日午刻

一、飛檐継目（印）

羽州油利郡本城

広誓寺

浄順

（傍線筆者）

*参考文献については、紙幅の関係から掲載できなかつ

たが、『本莊市史』史料編・通史編はもとより、入間田

宣夫・榎森進・遠藤巖・小口雅史・海保嶺夫・工藤大

輔・工藤弘樹・小林清治・瀧本寿史・中村和之・浪川

健治・福田千鶴・藤木久志・菅田慶信・山本隆志ら各氏の研究等を参考にさせていただいた。記して感謝申し上げたい。

〔付記〕本稿は、二〇〇三年八月十日、「本城満茂入部四百年記念講演会」において、講演した内容を、記録したものである。テープからおこしていただくにあたっては、本莊市史編さん室並びに生涯学習課の方々から大変お世話になった。感謝申し上げます。本稿にまとめるに際しては、大幅に加筆・補訂したことをお断りしておく。

なお、本稿は平成十二（一五）年度科学研究費補助金基盤研究B「奥羽地方における宗教勢力展開過程の研究」（代表今井雅晴）の調査による成果に基づいている。

（弘前大学大学院地域社会研究科教授）